

## 11. 高齢者介護施設における口腔ケアの推進に関する一考察

村上順彦、安齋理江、井口光世、布施修一郎（長野県歯科医師会）、  
柳澤茂（松本歯科大学）、鳥海宏（長野県衛生部）

要旨：口腔機能の回復・維持・向上としての口腔ケアは、介護予防効果のあるサービスとして実証されている。しかし、県下の介護現場での実態調査等からは、口腔ケアに対する課題（問題・疑問・要望など）が、多岐にわたって挙げられている。そこで、平成19年度8020運動推進特別事業において、高齢者介護施設における口腔ケアモデル事業を、ICFの視点に立って実施した。

その結果、施設における口腔ケアは、担当職員をキーパーソンとして、歯科衛生士が連携・支援することで、介護予防効果のあるサービスとして提供されることがうかがえた。

キーワード：口腔機能、介護予防、8020運動、ICFの視点、歯科衛生士

### A. 目的

施設における口腔ケアが、入所されている要介護高齢者の方々に対して、重度化の予防としての介護予防効果のあるサービスとして、日常的に、継続的に、また、効果的に取り組まれるようになるための要件を考察することを目的とする。

### B. 方法

長野県歯科医師会は、長野県衛生部健康づくり支援課より委託を受けた「平成19年度8020運動推進特別事業」において、「各ライフステージにおける口腔機能の育成・向上支援事業」の中で、「要介護者・高齢者・障害者歯科保健支援事業」の1事業として「高齢者介護施設における口腔ケアモデル事業」を実施した。

同モデル事業は、平成18年8月に、長野県社会部福祉健康政策チーム政策調整ユニットにより公表された「社会福祉施設等口腔ケア実態調査結果」に基づき、長野県社会部長寿福祉課の協力を得て、県内の第3次保健医療圏域(4圏域)単位で各1施設を選定して実施した。

高齢者介護施設は高齢者福祉の現場であり、「歯科」は施設協力医療機関として係わりを持っている。モデル事業は、医療と介護(福祉)の連携・協働の機

会となるため、「共通言語」が必要となる。介護現場においては、介護保険制度の理念に基づいた、より良質なサービスの提供のために「ICFの視点に立った、目標指向的介護」が取り組まれているため、「ICF」の視点で新たにアセスメント票を作成した。

特徴としては、県社会部の実態調査の結果や施設協力医療機関としての日常の対応などから、「生活機能」を基にしながら、「背景因子」の中の「環境因子」に重点を置き、物的環境(口腔ケアの用品・用具、移動や姿勢保持の装置や器具、口腔ケアに関する施設の構造や設備等)、社会的環境(ケアに関するシステムや体制、制度における問題点等)、人的環境(支援・関係・態度等)で課題の抽出を行い対応・評価した。

### C. 結果

#### ● 課題の抽出

ICFの視点に立った事前アセスメントの結果を分析し、以下の課題が抽出された。

- ・ 入所者の状態像が様々である。
  - ・ 施設においては、口腔ケアのシステムや体制があり、日々それに沿って対応している。
- 口腔ケアの体制と、入所者の態様によるグループ分けが必要
- ・ 口腔ケアは日々行っているが、対応が困難であつ

たり、効果や意義が実感できていない(口腔ケアを行うための「動機付け」が不十分である)  
 → 口腔ケアを行うための「動機付け」＝「変化の体験」が必要(歯科衛生士が、専門的口腔ケアによる再アセスメントで確認する必要がある)

● 課題への対応と結果

1. 口腔ケアの体制と、入所者の態様によるグループ分け

体制 態様	A.自立	B.一部介助	C.全部介助
CVAモデル			
廃用症候群モデル			
認知症高齢者モデル			

2. グループ別の問題点と課題及び対応と結果

○ グループA(自立)

【問題点】自立とされているため、介入がほとんどない

- 【課題】
1. 口腔内の状態の把握
  2. セルフケアの把握
  3. ホームケアの受容の確保
  4. 甘味摂取への対応
  5. 清掃用具などの管理
  6. 歯科治療・保健ニーズへの対応

【対応】介入の必要性の説明・実地指導、相談、治療の実施

【結果】変化の体験により、セルフケアの向上、ホームケアの開始、管理の向上、声かけの増加、認識の向上等が認められた

○ グループB(一部介助)

【問題点】廃用の予防としての適切な介入が必要だが、それに対する認識・実施が不足している

- 【課題】
1. 生活機能(廃用傾向)の把握
  2. 口腔内の状態(口腔機能)の把握
  3. ホームケアの受容の確保
  4. ケアグッズの選択と使用
  5. 歯科医療との連携

【対応】機能的ケアの説明・実施指導、相談、治療の実施

【結果】変化の体験による、適切な介入の認識・実施の向上が認められた

○ グループC(全介助)

【問題点】気道感染予防やターミナルケアに対する適切な介入等への認識はあるが、現状の評価や対応の方法等が分からない

- 【課題】
1. 健康状態、心身機能・構造の把握と評価
  2. ホームケアの受容の確保
  3. ケアグッズの選択と使用
  4. 歯科医療や医療・看護との連携

【対応】器質的・機能的評価やそれに対するケアの説明・実地指導、相談、治療の実施等

【結果】変化の体験による適切な介入の実施・向上などが認められた

3. 施設全体としての課題と対応及び結果

・家族への対応(状態、物品購入等での説明)  
 →説明が困難な場合は、歯科衛生士が直接説明して理解を得た

・連携(施設内連携、歯科との連携)  
 →歯科衛生士がコーディネートし連携が取れた  
 ・社会参加、楽しみとその代償(お菓子の販売等)  
 →担当者の工夫、家族への申し入れで改善された

4. 医療との連携の結果

医療的な対応が必要な事例が約3割あり、全例で対応実施または対応予定となった。

D. 考察

施設における口腔ケアは、担当職員をキーパーソンとして、歯科衛生士が連携・支援することで、介護予防効果のあるサービスとして、日常的に、継続的に、効果的に提供されると思われる。

E. 参考文献

- 1) 障害者福祉研究会：ICF 国際生活機能分類－国際障害分類改定版－，中央法規出版株式会社，2002
- 2) 大川弥生：介護保険サービスとリハビリテーション-ICF に立った自立支援の理念と技法－，中央法規出版株式会社，2004
- 3) 高齢者リハビリテーション研究会：高齢者リハビリテーションのあるべき方向，2004